

寺田澄江・小嶋菜温子・土方洋一編

『二〇一一年パリ・シンポジウム』

## 物語の言語―時代を超えて

堀越 萌由子

『物語の言語―時代を超えて』は、『源氏物語の透明さと不透明さ』（青簡舎 2009）に続く、フランス国立東洋言語文化大学（INALCO）日本研究センター主催シンポジウムの二冊目の論文集であり、『I 語りの生成―神話から説話・物語へ』、『II 『源氏物語』―語りの体系』、『III 拓かれる語りの地平―中世・近世、そして近代へ』、『IV 総括』と構成されている。INALCOは立教大学の提携大学であり、これまで何度か合同でシンポジウムを開催してきた。二〇一一年三月十九日に開催されたこのパリ・シンポジウムは、直前に日本を襲った東日本大震災のため規模の縮小を余儀なくされた。本書は当日発表を断念せざるを得なかった発表内容を補完し、震災を越え、日仏研究者の共同企画として計画された同シンポジウムの成果を集約した一冊である。以下内容を紹介する。

I 「語りの生成―神話から説話・物語へ」では、『源氏物語』以前の作品を神話や説話と「物語」の差異や関係性について扱う。フランソワ・マセ「神話から物語へ」は、『古事記』におけるモチーフの重複について、それによって相互の物語と共鳴することで、神話と「物語」が不可分な関係にあることを示唆する。マリア・キアラ・ミリオーレ「『日本霊異記』における語り」では、編纂動機や受容の状況を考察し、説話のなかにも物語に近いテクストがあることを紹介している。小嶋菜温子「『竹取物語』における語り―『今昔物語集』所収説話との比較から―」は本文と会話文の関係について、ともにかぐや姫の物語を伝える「竹取物語」と『今昔物語集』所収説話の比較により、前者に自らが構築した「物語」世界を維持すべく「会話文・内話文にも〈知〉的な脈絡を与えて、物語の論理展開を誘導する機能まで持たせようとする」姿勢を見出し、「物語」独自のレトリックの兆しを見出した。神話でも正史でもなく、説話でもない。「物語」の萌芽をまとめた一章となっている。

II 「『源氏物語』―語りの体系」。この章

では、主に「語り」の方法の問題が扱われる。土方洋一「『源氏物語』の巻々と語りの方法」は、時間的に並行関係にある巻に触れ、当時の物語の流布状況から「巻と巻との間のゆるやかな結合のあり方」を提示する。自らの体験を示す体験過去「き」に、客観的に正確に伝えようとする縛りがないことから、「き」で語られる蓬生巻・閨屋巻の語り手が必ずしも正確なものとは言えず、「源氏像を読者に印象させるためのバイアスのかかったフィルターとしての機能を有している」と述べ、語りによる内容的・性格的な違いを指摘することで、物語の流通状況から考えられる物語の読まれ方、読み方について論じている。一人称の語りと非一人称の語りの違いに注目し、帚木巻を実質的な物語の始発と捉えるグニエル・ストリューヴ「『源氏物語』帚木巻を通して見る物語観」、時制やアスペクトに重点を置きながら和歌の解釈を試みた藤井貞和「『源氏物語』というテクスト―夕顔巻の和歌を中心に―」や、女人成仏を認める法華経と若紫巻の関連性を論じたジャン・ノエル・ロペール「『源氏物語』の中にある仏教的場面について」もおさめられ、

「物語」が語りをはじめとする諸々の要素が絡み合う中で構築されていることを再確認させられる。

### Ⅲ 「拓かれる語りの地平——中世・近世、そして近代へ」。

ここでは、主に『源氏物語』の享受についてまとめられている。高橋亨「源氏物語」をめぐる語り手と作者の系譜」は、歴史的要素をふまえてとらえられる（作者）紫式部像について論じている。クリスティーナ・ラフィン「中世女流日記と『源氏物語』」は、『源氏物語』が中世の女性たちの日記にどのように解釈され扱われたかについて論じている。昨今注目される源氏絵研究では、エステル・レジエリー・ポエールが「新しい読みの地平へ——土佐光則が描いた源氏絵——」で、場面選択（絵画化される場面がどのように選択されているのか）研究の、図様を簡略化し体系づけようとする傾向に慎重な姿勢を示し、独自に源氏絵を四つの類型に分類したうえで、土佐光則による源氏絵の性質について論じている。その中で氏は徳川美術館本『源氏物語画帖』の若紫巻・権本巻、フリア美術館本『白描源氏物語画帖』を取り上げ、「絵の変奏」に注目し、物語テキスト

と絵、また絵画制作に対する絵師の関係を考察することで、光則の「パターンからの乖離」を基盤とする彼の在り方に迫っている。

本章では近世以降の語りする方法についても扱われ、長島弘明「春雨物語——反・近世小説としての語り——」では、上田秋成の執筆当時の境地や近世小説の傾向を鑑みつつ、同作が当時考えうるすべての文体の可能性を試みたものだとする。また、谷崎潤一郎の『鍵』の語りについて論じたエステル・フィゴン「読むことまたは性愛」では、主人公とその妻のそれぞれの思惑のもとに書かれた日記が、互いに書かれ・読まれ・読み返されることで展開する同作が、書き手・語り手・読み手の位相を複雑化することで語りが変容していく様を検証し、谷崎作品の語りの問題を提示している。

そして寺田澄江によるⅣ「総括」では、パリ・シンポジウムまでの経緯や当日の発表の様子や質疑のほどが要約され、会場の熱気が伝わってくるほどであり、本書所収の論文を一読されたあとで、この総括を見直してもためになるだろう。

本書は、『源氏物語』に関連する論文が

大半を占めるものの、扱われている問題は普遍的であり、「物語」に関わる研究の様相を大まかに古代から近代にいたるまで見渡すことができ、現代人としての自らの「読み」について考えさせられる。

（ほりこしもゆこ 大学院前期課程在學生）

小峯和明

### 『東奔西走』

### ——中世文学から世界の回路へ——

権 香淑

本書は、著者が十八年間勤めた立教大学の定年退職を迎えるにあたり、今までに書いた短文類、特にこれまでの論文集等に入られなかった短いエッセイ等をまとめたものである。

その内容は、著者が国内や海外に資料調査に赴いた時の旅の印象なども交えて異文化に焦点をあてたものとなっている。国内外の多くの地を訪れ、様々な書物や資料、そして人々に出会い、本書はそうした出会いの賜物である、と著者は述べている。

本書の構成は以下の通りである。